

第2章 計画地の現状

1 自然的環境

(1) 史跡地の位置と立地

兵庫県神戸市は、兵庫県南部に位置する県庁所在地である。市街地の北方に、標高400～900mの六甲山系が東西方向に連なる。南東側が断層崖をなす傾動地塊で、この山系から南流する住吉川、都賀川、生田川、新湊川などが山麓に複合扇状地状三角州を形成した。市街地はこの山麓の狭い低地につくられたが、東西距離は約35kmにも及ぶのに対し、南北幅は広い地区でも約5kmで細長い形態をなす。

史跡五色塚（千壺）古墳 小壺古墳が位置する神戸市垂水区は、神戸市の南西部に位置し、六甲山系の西に続く丘陵上にあたり、阪神間のベッドタウンとして、多くの人々が生活する住宅地である。瀬戸内海に面する海岸線は、付近で最も南に突き出ている、幅約4kmの明石海峡を挟んで淡路島を指呼の間に望むことができ、古くから風光明媚な場所として親しまれている。平成10年には、淡路島とつなぐ明石海峡大橋がつくられた。

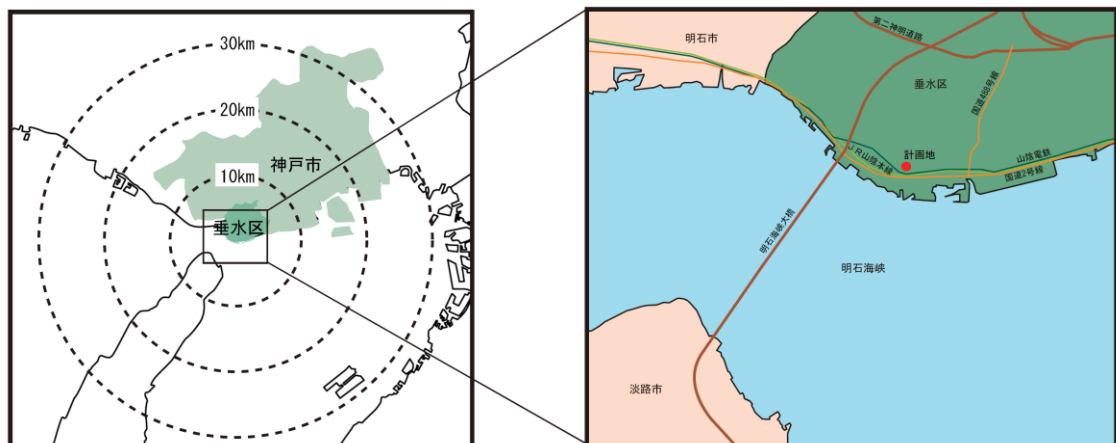


図2-1 周辺地図



図2-2 計画地周辺図

丘陵が海岸線近くまで張り出してきているため、主な交通網であるＪＲ山陽本線、山陽電気鉄道、国道２号が海岸線に沿って敷かれている。

明治19年の仮製地形図によると前方部の先端から海岸線までの距離は約100mであった。『播州名所巡覧図絵』や「播州明石郡舞子浜続 垂水名所五色塚図」を見ても近世期からあまり海岸線は変化しておらず、おそらく古墳築造当時においても同様であったと推定される。海上から見上げる巨大構造物はそれを造った人物の偉大さを強く印象づけたに違いない。ところが、明石海峡大橋建設に伴う埋め立てによって、人工砂浜による海水浴場や集客施設が建ち並び、海岸線は前方部端から約300mも離れ、旧来の地形が変化している。

計画地への公共交通機関からのアクセスは、JR山陽線垂水駅から徒歩約15分、山陽電鉄霞ヶ丘駅から徒歩約10分の距離にあり、車では国道２号商大筋交差点を北折し、約５分程度である。計画地の周囲は住宅地となっており、計画地から約200m程度南側の埋め立て地には大型商業施設が位置している。

(2) 気 候

神戸市の気候は、年間を通じて温暖・少雨の瀬戸内気候区と、大都市特有の都市気候の特徴が現れる。

雨が少なく湿度が低いため乾燥し、海岸に近いので暑さや寒さも比較的しのぎやすい。

特に冬季は少雨・多照が特徴であるが、梅雨期には大阪湾を北上する暖湿気流と六甲山地の影響で、局地的な大雨が降ることもある。それに加え、近年の異常気象により年間降水量が一定しない傾向にある。

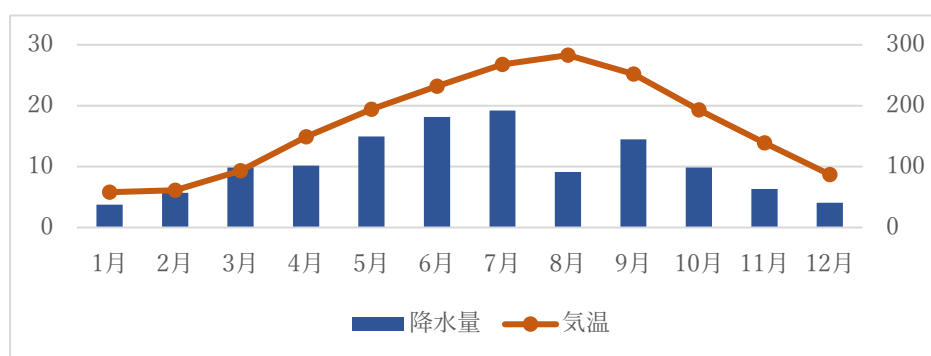


図 2-3 平成 30 年度 月別平均気温と降水量

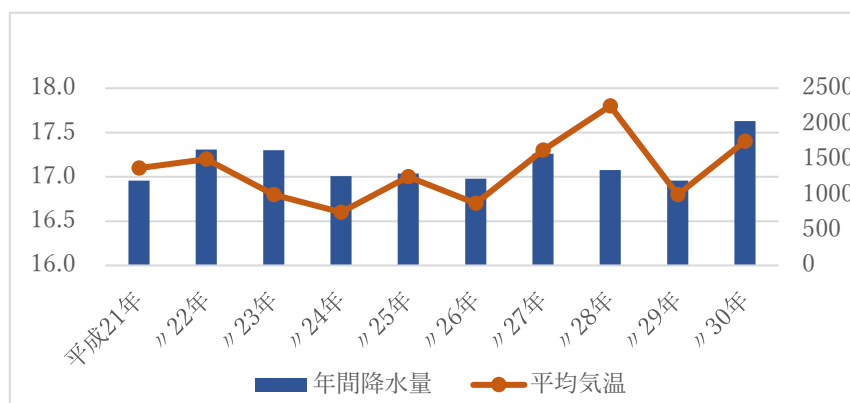


図 2-4 過去 10 年間の降水量と平均気温

(3) 地 質

古墳の所在する神戸市垂水区周辺は、六甲山地と播磨平野を隔する高塚山断層の西側にあたり、多様な地質環境を示している。

高塚山断層の東側には標高の高い神戸層群が分布し、六甲山地へと連なっている。これより西側は大阪層群(明石累層)に覆われ、標高100m前後の段丘が広がっている。この六甲山西端から加古川付近に発達した段丘には、第四紀の間氷期(温暖期)の海進の影響によるものがあり、古墳付近に見られる西八木層もその一つである。こうした海成層には高塚山貝層のように貝化石を多産する層が知られ、海成層に含まれる珪藻や火山灰の分析、有孔虫の酸素同位体の分析などからその年代が求められている。これによれば、西八木層は第四紀なかでも新しい年代のものであることが分かっている。

このように、五色塚古墳は海成段丘の先端に位置している。これらの段丘は灌漑が困難なため、水田には不向きであったようで、明治中頃には古墳周辺は松林、その周囲は畑として利用されていた。

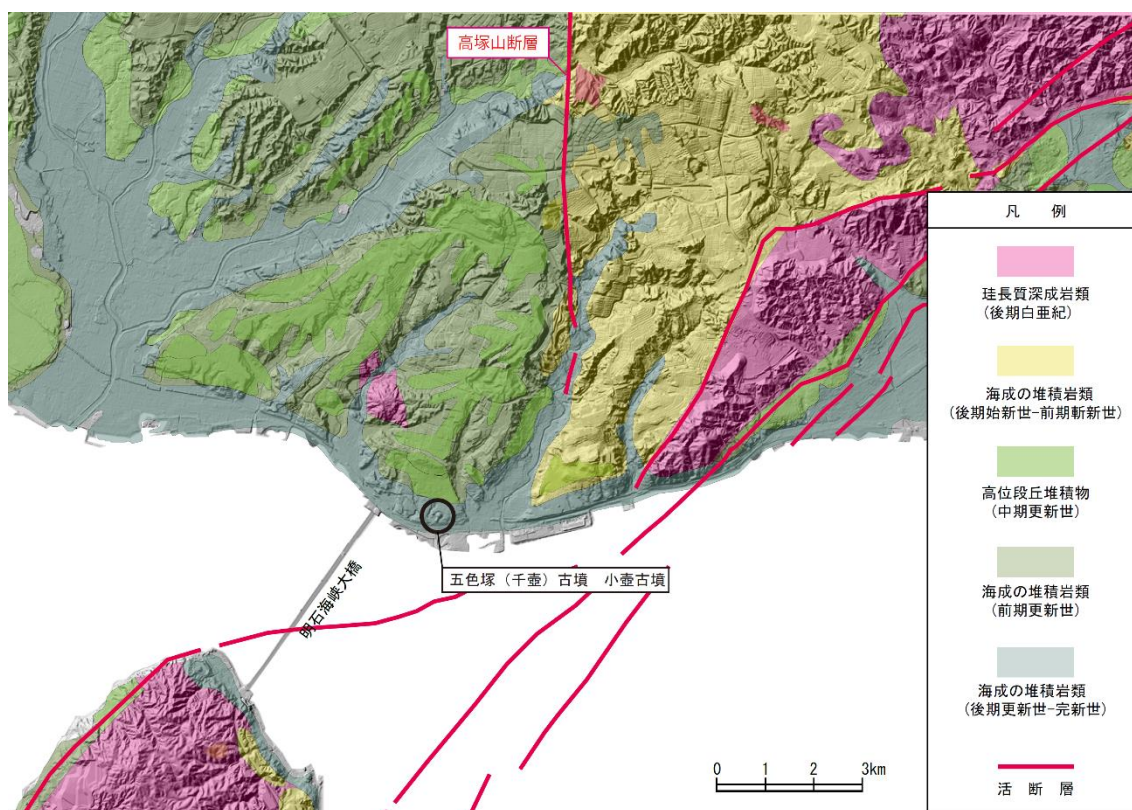


図 2-5 地質図

また、段丘上にはいくつかの開析谷があり、五色塚古墳をはさむ東西にも大きな開析谷が確認できる。現在、この段丘上は宅地開発によりほぼ平坦に造成されていて、旧地形をとどめる所はないが、古墳築造にあたり、これらの開析谷が利用されたものと考えられている(以上、『史跡五色塚古墳 小壺古墳発掘調査・復元整備報告書』より)。

(4) 植生と動物

神戸市では、気候風土、地形などの条件をもとに、以下のような生物の生息・生育基盤を有している。大都市でありながら多様な動植物が生息・生育しており、市内で7,662種の動植物が確認されている。

●植 生

神戸市は平野部から山地部にかけて、概ね暖温帯域であるため、潜在自然植生はシイ・カシ類が卓越する照葉樹林となる。ただし、六甲山山頂付近などは冷温帯域であり、ブナ林などが潜在自然植生する。なお、その境界付近にあたる地域（中間温帯）はモミなどが優占する林になる。

中世以降に荘園制度が普及したことにより、荘園の拡大とともに自然林からアカマツやコナラなどの代償植生に移行した。安土桃山時代には六甲山の森林に入会権が発生したことによって薪炭材としての乱伐が進み、荒れた森林はさらに山火事を呼んで荒廃にいつそうの拍車をかけた。そのため、樹林帯の植生はほぼ全域がアカマツ、コナラなどの二次林でおおわれており、自然林はわずかしかなかった。

残存する自然林では、六甲山北斜面の一部にブナ、ミズナラを主体とする落葉広葉樹林や、太山寺などにカシ、シイなどの常緑広葉樹林などの貴重な植物相が見られるほか、鎌倉峡には貴重なアカマツ・ハナゴケ群落が残存する。

●動 物

神戸市内で5,242種の動物が確認されている。

このうち、神戸版レッドデータ2015においては401種が希少種に選定され、特に両生類では76%（全確認種17種中で13種）が選定された。負の影響を及ぼす要因としては、「生息・生育環境の悪化」がどの分類群においても最も多く、次いで「二次的環境の放置」「捕獲・採取」が多くなっている。

このほか神戸市では、貴重植物群落として58箇所が、また鳥類の生息地となる聖域を「鳥類サンクチュアリ」として4箇所が選定されている。

2 歴史的環境

●旧石器時代・縄文時代

旧石器時代の遺構を伴う遺跡は現在のところ確認されておらず、舞子古墳群の毘沙門2号墳、大歳山遺跡、野々池遺跡などでナイフ形石器などの採集ないし出土が知られるのみである。また名谷遺跡有舌尖頭器が確認されている。

縄文時代早期の押型文土器が確認される遺跡としては境川遺跡がある。ここでは土器の他尖頭器、異形局部磨製石器などが採集されている。山田川流域の丘陵上にある狩口台遺跡でも高山寺式の土器が出土している。標高30mの丘陵上に位置する大歳山遺跡は前期末の土器が主体であるが、早期末、中期及び晩期の土器も確認されている。現海岸線から約300m

の沖積地にある垂水・日向遺跡では早期～前期に相当する干潟や、洪水によって押し流された流木が中期～晩期の土器とともに確認されている。

●弥生時代

近畿地方最古段階の土器が確認されていることで古くから知られる吉田遺跡や片山遺跡は、明石川流域に広がる沖積地の背後にある段丘上に位置する。この沖積地は生産基盤となる稲作農耕の恰好の地であったことから、流域には玉津田中遺跡や新方遺跡という拠点集落が前期より成立し、以後周辺地域に多くの集落の形成を促す。これらの集落は河川流域ごとにいくつかの遺跡群としてとらえられており、ここでは遺跡群ごとに主要遺跡を概観する⁽¹⁾。

・明石川と櫛谷川の合流点付近の遺跡

明石川中流域の沖積地にある玉津田中遺跡では、大規模な発掘調査により居住地・水田・墓地などの集落の全容が明らかにされている。豊富な木製品や小型仿製鏡が出土しており、遺物の出土量でも他の遺跡を圧倒する大集落である。しかし、洪水による土砂に見舞われ、中期後半には一時的に集落は衰退するが、後期中葉以降再び大きな集落が形成され古墳時代後期まで継続する。この周辺では中期以降、居住・小山遺跡や菅野遺跡・栃木遺跡・日輪寺遺跡・二ツ屋遺跡など多くの集落が成立する。

・明石川と伊川の合流部付近の遺跡

明石川下流には近畿地方最古段階の土器が確認される吉田遺跡や片山遺跡がある。新方遺跡では石鏃を射込まれた近畿地方最古の前期の人骨が良好な状態で確認されている。中期には最盛期を向かえ、玉造り製作跡を含む多くの竪穴建物や大規模な方形周溝墓などが確認されており、古墳時代にかけて存続している。この付近では今津遺跡や出合遺跡・高津橋岡遺跡・今池尻遺跡などの集落遺跡があり、後期に新たに出現する吉田南遺跡は古墳時代後期頃まで大きな集落として存続する。

・明石川支流伊川流域の遺跡

明石川の支流伊川下流域には、新方遺跡の拡大化にともなって出現する南別府遺跡があり弥生時代を通じて伊川流域の中核的な集落として存続している。伊川流域でも中期以降に多くの遺跡が確認されており、池上北遺跡や池上ロノ池遺跡・上脇遺跡などがあげられる。そのほか、標高100m以上の丘陵上に位置する頭高山遺跡や表山遺跡、櫛谷川流域にある青谷遺跡や城が谷遺跡などは、中期末～後期初頭に営まれた高地性集落である。なかでも周辺の高地性集落の消滅を待つように出現する表山遺跡は環濠を伴い、小形仿製鏡や多量の西方の土器を有する集落として周辺遺跡とは異質な様相を示している。

・山田川流域の遺跡

山田川流域では大歳山遺跡で前期中葉～後期にかけての集落が確認されている。中期以降流域の東西の丘陵上には舞子東石ケ谷遺跡や狩口台遺跡などの高地性集落が後期にかけて営まれる。高地性集落が後期後半まで継続する点で明石川流域の集落との性格の違いが指摘されている。また、投ケ上からは扁平紐式六区袈裟櫛紋銅鐸が出土している。摂播国境付近にそびえる鉢伏山山頂にある鉢伏山遺跡は高地性集落の一つとして知られ

ている。なお、垂水沿岸部で確認される弥生時代の遺跡としては垂水・日向遺跡で前期～中期の土器がわずかに確認されるのみで、大きな集落の形成は認められない。

●古墳時代（古墳）

五色塚古墳築造以前、垂水沿岸部での前期古墳の造営は認められず、明石川流域に天王山4号墳、5号墳、それに続く白水瓢塚古墳の造営が確認されるのみである。

天王山古墳群の4号墳は、明石川流域で最古の古墳に位置付けられ、5号墳がそれに継ぐ。いずれも前期前半の方墳で、5mを超える割竹形木棺など複数の埋葬施設を持つ。4号墳では鉄製品や玉類のほか、八禽鏡などが出土している。続いて前期後葉には明石川流域最古の前方後円墳である白水瓢塚古墳が標高60mの薬師山山頂に築造される。大正末～昭和初年の直良信夫氏による踏査により、墳丘には3列の埴輪列が巡り、古墳周囲には埴輪円筒棺が100基近く存在することなどが報告されている。発掘調査により墳丘規模56mの柄鏡形の前方後円墳であることや古墳周辺の埴輪棺や木棺墓の存在が明らかになっている。埋葬施設は割竹形木棺を納めた粘土槨で、前方部墳頂にも埋葬施設が確認されている。

前期末～中期初頭に五色塚古墳が築造され、それを契機に周辺古墳の造営が開始される。

五色塚古墳西方500mの地にある歌敷山東古墳、歌敷山西古墳はいずれも円墳で、埋葬施設は粘土槨である。丘陵地形を利用して墳丘を築き、墳頂には鱗付円筒埴輪や蓋形埴輪などの存在が報告されている。近年、名古屋市博物館に両古墳出土の埴輪片が収蔵されていることがわかった。また、歌敷山両古墳の西方には円筒埴輪片などが確認された墳丘状の高まりが舞子ヶ平古墳の名称で報告されている。

五色塚古墳西方800m付近の海岸沿いの砂浜には、多くの埴輪棺の埋葬で知られる舞子浜遺跡がある。鱗付円筒埴輪や朝顔形埴輪、盾形埴輪、蓋形埴輪など数種の埴輪を組み合わせて棺を構成しており、棺内からはまれに鉄製刀子や水晶製勾玉、碧玉製管玉、ガラス小玉などの副葬品の出土するものも報告されている。

また、現在では全く地上に痕跡がなく、古記録や絵図などに記載された古墳として、「遊女塚」、「四ツ塚」、「七ツ塚」、「東方陪塚」の名があげられている。

遊女塚は、「播州名所巡覧図絵」では五色塚古墳が「遊女塚より一丁斗西にあり」とあることから、五色塚古墳の東およそ100mあたりに存在していたことになり、挿図にもその方向に描かれている。この塚は明治21年に鉄道敷設工事で消滅しており、塚上の宝篋印塔のみが移設され現存している。消滅を報ずる「神戸又新日報」⁽²⁾には「銅類を以て鑄造せる如き蛤蜊貝幾個ともなく顕出し」とあるが、遊女塚が古墳であったかどうかはわからない。

四ツ塚・七ツ塚については、全くその位置を推定する術がないが、太田陸郎のいう⁽³⁾「東方陪塚」は、その表現から、五色塚古墳を挟んで小壺古墳とは対称的な位置にあったようにも思える。この「東方陪塚」は、『神戸地方古墳地名表』によると、「姫塚（右陪塚）」にあたるようである。表の墳形欄には「円墳 埴輪（失）」と記載があり、すでに「全く滅亡してしまっているもの」とされている。また、地元ではかつて五色塚古墳の東側に小壺古墳と同規模の古墳があったと語り継がれているものの、確証はない。

以上のように周囲には海岸に面した段丘の先端に小壺古墳をはじめ歌敷山両古墳、舞子

ケ平古墳、文献に記載のある遊女塚、小塚、四ツ塚、七ツ塚などの古墳が築造され、埴輪棺による墓域を形成する舞子浜遺跡を含めて、五色塚古墳を中心に一つの古墳群を形成していたと考えられる。しかし、現在確認できるのは小壺古墳及び舞子浜遺跡のみで、他の古墳は宅地造成で破壊されるなどいずれも消滅しており目にすることはできない。

舞子浜遺跡をはじめ、小壺古墳・歌敷山東古墳・歌敷山西古墳で出土した埴輪は五色塚古墳の埴輪と共通した特徴があると、以前から指摘されてきた。『史跡五色塚古墳小壺古墳発掘調査・復元整備報告書』作成において、出土した埴輪の分析を担当された廣瀬覚氏によると、「五色塚古墳とその周辺には、佐紀陵山古墳併行期に王権からの直接伝播による埴輪が広範囲に展開する」⁽⁴⁾とされた。五色塚古墳周辺では大規模な工人集団により埴輪が生産され、同時期の近接する古墳をはじめ、幣塚古墳や念仏山古墳にまで一元的に供給されたものとみられ、五色塚古墳を頂点とする一代限りの階層秩序が想定されている。



図 2-6 五色塚古墳および関連古墳と推定古代山陽道

このほか、埴輪の有無は確認されていないが、大歳山遺跡では、石釧や鏡、勾玉などの玉類が出土した粘土槨があったようで、墳形などは不明だが、出土した石釧などから五色塚古墳とほぼ同時期の年代が与えられている。

五色塚古墳築造後、中期古墳の造営が確認されるのは明石川右岸の段丘上にある王塚古墳である。欽明天皇の皇女舎人姫王の墓に比定され、玉津陵墓参考地として宮内庁の管理下にあるため詳細については不明であったが、平成12年の発掘調査で全長74m、3段築成の古墳であることが確かめられている。また出土埴輪より五色塚古墳の直後段階の時期が与えられている。

中期には当該地での活発な古墳の造営は認められないが、後期になると明石川流域、山田川流域各地で群集墳が盛行する。

明石川流域では後期前半頃にかけて木棺直葬の埋葬形態をもつ古墳群が各地で形成される。標高70m前後の丘陵上には天王山古墳群、池ノ内群集墳、柿谷古墳群、鬼神山古墳、松陰新田古墳群などが分布している。天王山古墳群では前期古墳である4号墳と5号墳の後、6世紀前半の帆立貝式古墳である3号墳が築かれ6世紀後半まで古墳群を形成している。直径14mの円墳である鬼神山古墳からは2基の礫床が確認され、鉄製馬具や武具、玉類をはじめ、五獣形鏡などが出土している。

標高30m前後の段丘上に出合遺跡、水谷遺跡、居住・小山遺跡や片山遺跡などで古墳が確認されている。いずれも墳丘は後世に削平を受けており、周溝のみが確認されている。出合遺跡では帆立貝式古墳である亀塚古墳を、水谷遺跡では同じく帆立貝式古墳の水谷大東古墳を各々盟主墳に方墳や円墳で構成される古墳群を形成している。居住・小山遺跡は木棺直葬と横穴式石室を埋葬施設にもつ慶明寺古墳群の一支群と捉えられている。広範な範囲で発掘調査が行われた結果、古墳群を含めた集落内の様相が明らかになった高津橋大塚遺跡や延命寺古墳周辺では、滑石製の玉類や捩文鏡が出土した割竹形木棺を納める高津橋大塚古墳を中心に5基の古墳の造営が確認されている。また、松本4号墳の周辺には小型の埴輪棺が確認されている。明石川下流域にはあさぎり寮古墳などの木棺直葬と推定される後期古墳がある。

明石川流域では後期前半頃までは木棺直葬の群集墳の盛行をみるが、後期後半、明石川上流や後述する山田川流域で横穴式石室を持つ群集墳が形成される。

山田川東岸の舞子丘陵にある舞子古墳群には6世紀中頃～7世紀初頭頃の横穴式石室を主体部にもつ古墳が数多く点在している。古墳の多くは宅地開発などで破壊されていて現在は十数基ほどが確認されるのみだが、その総数は60基近くに及ぶものとされている。

古墳群の最西部にある大歳山支群には、全長35mの前方後円墳である大歳山2号墳が確認されている。大歳山2号墳は横穴式石室を埋葬施設にもち、装飾付須恵器の小像が確認されている。

山田川西岸には団地造成で消失した多聞群集墳があり、推定80～100基の古墳が7支群に分かれて点在していた。山田川西岸の最下流には二重の周濠をもつ6世紀後半のきつね塚古墳がある。

福田川流域の標高170m付近の丘陵上には6世紀後半に築造される高塚山古墳群がある。古墳群は15基からなり、埋葬施設はすべて横穴式石室である。なかにはT字形の石室で複室構造をとるものや、石室の壁面に馬などの線刻を施したもの、火葬の痕跡が残されるものなどがあり、多様な埋葬の状況が明らかになっている。

●古墳時代（集落）

明石川流域の弥生時代を通して中核的な集落として存続した玉津田中遺跡や新方遺跡は古墳時代になるとその規模が縮小し、吉田南遺跡で大規模な集落が形成される。吉田南遺跡では古墳時代全時期を通して多くの竪穴建物が検出され、豊富な遺物の出土が報告されている。一方、玉津田中遺跡ではその規模は縮小するものの、前期～中期にかけての竪穴建物や水田などの継続が認められ、同じく新方遺跡では中期～後期の竪穴建物から玉造り

関連の遺物が出土している。

明石川流域のその他の前期集落は弥生時代後期から継続する集落として確認される遺跡が多い。中期の大規模集落である出合遺跡では、中期～後期にかけての竪穴建物が多数検出され、韓式系土器の出土も報告されている。後期にも多くの集落が確認されているが、中でも白水遺跡、高津橋大塚遺跡周辺では、竪穴建物及び掘立柱建物や滑石製品を伴う祭祀遺構、水田域が調査されており、その背後にある古墳群を含めた集落の様相が明らかになっている。また、寒鳳遺跡では6世紀中頃の大壁造り建物が確認され、特異な集落の様相を示す遺跡として捉えられている。また、上ノ丸貝塚からは小規模ではあるが後期の貝層が確認されている。

このように明石川流域には古墳時代全時期を通じて継続する吉田南遺跡や玉津田中遺跡、新方遺跡を中心に多くの集落が形成されている。

●古 代

五色塚古墳は『和名類聚抄』記載の播磨国明石郡六郷のうちのひとつである垂水郷に位置する。『東大寺要録』所引の太政官符によると、天平20年(748)11月に明石郡垂水郷の塩山地360町が東大寺に勅施入されたとある。

五色塚古墳の位置は、築造当時から政権中枢の玄関口を意識したものと考えられ、それは、大化2年(646)の「改新詔」における「畿内国」の西限を「赤石の櫛淵」としていることからもうなずける。「赤石の櫛淵」は、現在の須磨区一の谷から垂水区塩屋町にかけての海岸線とする説が有力である。また、播磨国に属しているが、その位置は東方の摂津国、明石海峡を隔てた淡路国との旧三国の国境付近に位置している。

古代の遺跡の状況について目を向けてみると、吉田南遺跡では古墳時代から引き続き大規模な集落が維持されている。奈良～平安時代には規格性のある掘立柱建物群が検出され、木簡や墨書土器、陶硯、帯金具など官衙的性格の強い遺物も出土しており、明石郡衙に比定されている。白鳳時代に創建された明石郡唯一の寺院である太寺廃寺では、創建時の掘立柱建物や竪穴建物が検出され、多くの瓦が出土している。奈良時代の集落は新方遺跡や北別府遺跡、高津橋岡遺跡、菅野遺跡がある。

上池遺跡では平安時代前半の遺物が多量に出土しており、中には硯や墨書土器、瓦などが含まれることから一般集落とは異なる様相を示している。平安時代後期になると多くの集落が形成されるが、そのなかには一般集落とは異なった様相を示す遺跡も確認されている。白水遺跡では平安時代の梵鐘鑄造遺構が確認され、また多くの瓦類が出土していることから近接して字名として残る「延命寺」の存在が推定されている。寒鳳遺跡では平安後期の掘立柱建物とともに、陶硯や石帯、青磁容器蓋や瓦などが出土している。付近には吉田南遺跡や新方遺跡、赤羽遺跡などがあり旧山陽道との関連でも注目される遺跡である。

海岸に面した段丘上に位置する林崎三本松瓦窯跡は、平安～鎌倉時代にかけての瓦類を中心に焼成した窯跡である。なかでも軒丸瓦・軒平瓦の割合が高く、同様な文様が京都の六勝寺跡、鳥羽離宮跡、平安京内裏跡などから出土しており、注目されている。

●中世

平安時代末、二ツ屋遺跡では整然と配置された掘立柱建物群の内側に池を配し、瓦葺きの持仏堂と推定される礎石建物が検出されており、地方貴族の邸宅と考えられている。引き続き鎌倉時代にもより多くの集落が形成される。玉津田中遺跡では周囲を堀で囲んだ居館の造営が認められ、大量の遺物が出土している。また、前開遺跡ではこの時期に新たに集落の形成が認められる。垂水・日向遺跡では平安末～鎌倉時代の掘立柱建物などが検出され、東大寺領「垂水荘」との関連が指摘されている。また、付近には乙木遺跡や野田遺跡などの中世集落が確認されている。

現垂水区内には、下端荘・垂水荘があり、このうち下端荘は養和元年(1181)の後白河院庁下文案(平安遺文4013、新熊野神社文書)で今熊野社領の一つとしてあげられているが、『吾妻鏡』建久3年(1192)12月14日条によれば、摂津国福原荘などとともに平家没官領となり、源頼朝からその妹(一条能保の妻)に譲られ、一条能保の子孫に伝領されている。

一方、垂水荘は、先に記したように天平20年に垂水郷の塩山地が東大寺に勅施入されたことに始まり、その範囲は、東が寒河、南が南海辺路、西が垂水河、北は太山堺とされている。また、大治5年(1130)の東大寺諸荘文書并絵図等目録では面積が361町となっているものの、この時期まではほぼ同じ範囲が保たれていたことがわかる。その後、垂水荘は、久安3年(1147)に、同じ播磨国内の粟生荘・赤穂荘を合わせた三荘とともに、播磨国賀茂郡大部荘の田地荒野と交換されて東大寺領を離れ、国衙領となった。

承久3年(1221)の承久の乱を鎌倉幕府が沈めると、幕府勢力が播磨地方にも進出し、そのため貨幣経済が発達したため、各地悪党が蜂起するようになる。

このうち、赤松円心は六波羅探題攻略に功績を上げ、足利尊氏を助け室町幕府成立に貢献して播磨守護としてこの地方を治めることとなる。

その他に但馬の山名氏、丹波と摂津の細川氏が有力守護大名としてしのぎを削っていたが、明德2年(1391)の明德の乱により山名氏が討伐され、赤松氏が勢力を拡大する

しかし、嘉吉元年(1441)嘉吉の乱に山名氏に敗れ衰退するが、応仁の乱による混乱に乗じ赤松正秀や赤松浪人宗も蜂起したため山名氏は徐々に劣勢となり、赤松氏は播磨支配を回復し以後約1世紀にわたり「御屋形」とあおがれることとなる。

室町時代の遺跡としては、多くの集落の他、中世寺院関連の遺跡が確認されている。日輪寺遺跡では室町後期に焼亡されたと伝えのある日輪寺の寺域区画に想定される築地状遺構が確認されている。宅地造成に伴う大規模な発掘調査により中世山岳寺院のほぼ全容が明らかになった頭高山遺跡は、地域の伝承などから天台宗「大谷寺」跡と推定されている。

室町幕府滅亡後の天正5年(1577)織田信長の名により羽柴秀吉が姫路城に入るが、石山本願寺と毛利氏が結んだため、地域が安定しなかった。

しかし、天正9年(1581)秀吉が淡路を平定し、摂津・播磨の治安がようやく回復したが、翌天正10年の本能寺の変により信長の時代が終わる。同年、秀吉は山崎の合戦で明智光秀をやぶり、信長の後継者の地歩を進めた。この合戦の論功行賞で池田恒興は、大坂・尼崎・兵庫の12万石を貰っている。恒興はこれにより大坂に入って大坂城主となり、長男の池田元助は兵庫に在城して神戸地方を治めた。

天正11年、賤ヶ岳の戦いで羽柴秀吉が柴田勝家を滅ぼすと、恒興は岐阜に移されて秀吉が大坂に入り、池田氏の旧領であった尼崎・兵庫は秀吉の甥である三好秀次に与えられる。

●近 世

慶長5年(1600)、関ヶ原の戦いで勝利した徳川家康が、秀吉の後継者となる。この功労者として池田輝政が播磨52万石の大名となり、現垂水区は池田領となる。元和3年(1617)7月に行われた摂津・播磨を中心とする国替により、池田家は因幡国鳥取へ移封され、そのあとに本多忠政が姫路城主に封じられ、本多政朝が龍野藩5万石、小笠原忠真が10万石で明石藩に入封し、姫路・明石・龍野の譜代3藩が治めることとなる。

以降、現垂水区を含む明石藩はその後、寛永10年(1633)に松平康直(7万石)、同16年に大久保忠職(7万石)、慶安2年(1649)に松平忠国、延宝7年(1679)に本多政利と譜代大名が一貫して治め、天和2年(1682)に松平直明が越前大野から入部している。

幕末に入り、嘉永7年(1854)、ロシア軍艦が大阪湾に侵入してきたことが、幕府に摂海警備を促すこととなり、和歌山・徳島・明石などの諸藩に沿岸警備、砲台の築造が命ぜられた。このうち明石海峡の備えとして明石藩が文久3年(1863)に舞子台場を築造、徳島藩も同年松帆台場を築造している。

●近・現代

計画地周辺は江戸時代までは明石藩の領内だったが、明治4年の廃藩置県により姫路県となり、その直後に播磨県となったのち明治9年に兵庫県に併合された。

明治21年に山陽鉄道(現JR西日本)兵庫～明石間が開通し、垂水駅が開設された。これにより、神戸や大阪からの観光客が来るようになり、舞子浜には料理旅館が立ち並んだ。

明治22(1889)年の町村制施行により明石郡垂水村が成立する。同年神戸市も誕生している。昭和6年に県立神戸高等商業学校が、神戸市の仮校舎から垂水村に移転したことや、昭和8年には神明道路が開通して交通の便がよくなり、人口の増加と、神戸市のベッドタウン化が進んだ。昭和16年には神戸市に編入され、須磨区垂水町となる。そして、昭和21年に須磨区から独立した垂水区が新設される。翌22年には明石郡伊川谷村、櫛谷村、押部谷村、玉津村、平野村、神出村、岩岡村の各村が神戸市に合併し垂水区に編入されるが、昭和57年8月に垂水区から西神地区を分区し、新たに西区が誕生している。

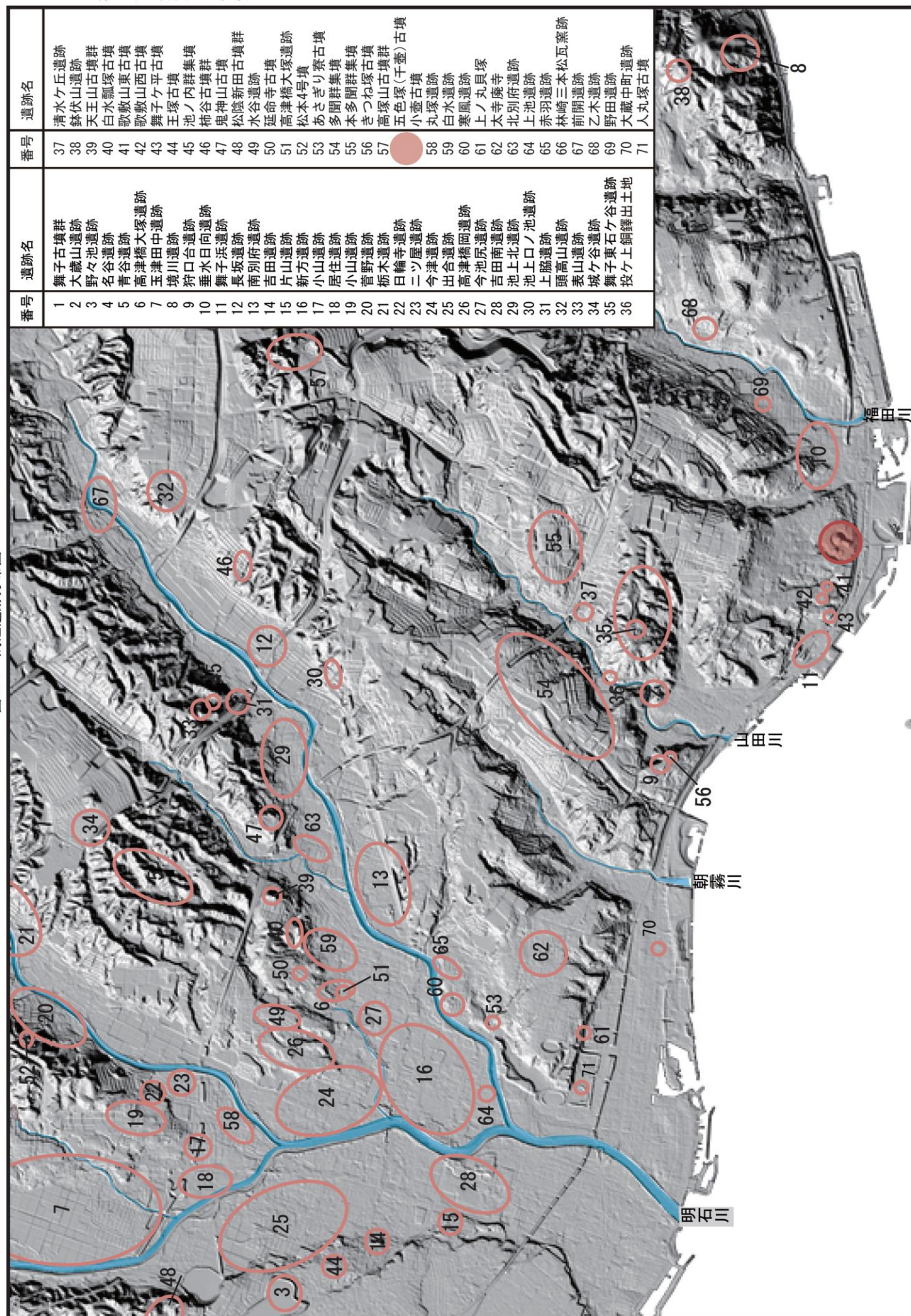
垂水区の人口は昭和30年代では約5万人であったが、昭和40年代では約10万人、昭和56年には30万人を超え、分区を経て現在は約22万人前後を数える。

【註】

- (1) 丸山 潔 1992「弥生集落の動態(1)一摂播国境地域一」『究班』
- (2) 『神戸又新日報』明治21年10月2日号第3面
- (3) 太田陸郎 1931「有鱗埴輪圖簡」『考古学』第2巻第4号(東京考古学会)
- (4) 廣瀬覚 2017「明石川流域における埴輪の展開とその背景」『播磨の埴輪』

※各遺跡の発掘調査報告書等の参考文献は省略した

図 2-7 周辺遺跡分布図



3 社会的環境

(1) 人 口

平成27年国勢調査の結果、平成27年10月1日現在の神戸市の人口は1,537,272人で、前回の平成22年調査に比べ、6,928人、0.4%減少した。大正9年に行われた第1回国勢調査の608,644人と比べると、この90年間で928,628人増加しており、総人口は約2.5倍になっている。

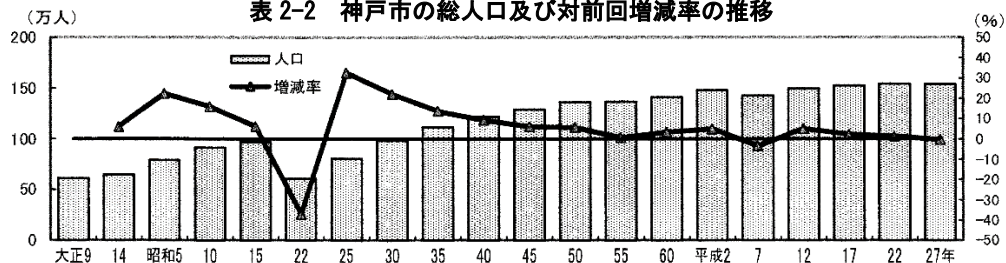
神戸市の人口は、戦後の昭和22年臨時国勢調査以来、周辺地域の編入やニュータウン開発などにより一貫して増加を続けていたが、平成7年の阪神・淡路大震災によって大量に市外に流出したことから、平成7年調査では戦後初めて人口増減数がマイナスとなった。

その後、平成12、平成17年、平成22年調査では、人口増減率4.9%増、2.1%増、1.2%増と全国を上回って増加していたが、平成27年調査では0.4%減と、全国と同様に減少に転じる結果となった。

表 2-1 国勢調査による人口の推移

年 次	面 積	世 帯 数	人 口			対前回国勢調査		女 100に 対する男	1世帯 当たり 人 員	人口密度 1 km ² 当 たり
			総 数	男	女	人 口 増減数	増減率 (%)			
大正 9 年	63.58	138,970	608,644	323,946	284,698	...	...	113.8	4.38	9,573
14 年	63.58	151,505	644,212	335,762	308,450	35,568	5.8	108.9	4.25	10,132
昭和 5 年	83.06	178,325	787,616	406,348	381,268	143,404	22.3	106.6	4.42	9,482
10 年	83.06	198,018	912,179	467,945	444,234	124,563	15.8	105.3	4.61	10,982
15 年	83.06	216,076	967,234	491,553	475,681	55,055	6.0	103.3	4.48	11,645
22 年	390.50	149,347	607,079	307,772	299,307	△ 360,155	△ 37.2	102.8	4.06	1,555
25 年	420.64	192,977	804,501	400,225	404,276	197,422	32.5	99.0	4.17	1,913
30 年	492.60	231,874	981,318	484,604	496,714	176,817	22.0	97.6	4.23	1,992
35 年	530.44	279,599	1,113,977	550,321	563,656	132,659	13.5	97.6	3.98	2,100
40 年	533.72	331,388	1,216,666	601,846	614,820	102,689	9.2	97.9	3.67	2,280
45 年	537.18	377,473	1,288,937	636,846	652,091	72,271	5.9	97.7	3.41	2,399
50 年	539.98	427,031	1,360,605	667,893	692,712	71,668	5.6	96.4	3.19	2,520
55 年	542.35	462,281	1,367,390	665,029	702,361	6,785	0.5	94.7	2.96	2,521
60 年	544.17	487,849	1,410,834	681,810	729,024	43,444	3.2	93.5	2.89	2,593
平成 2 年	544.55	539,151	1,477,410	712,594	764,816	66,576	4.7	93.2	2.74	2,713
7 年	547.40	536,508	1,423,792	683,228	740,564	△ 53,618	△ 3.6	92.3	2.65	2,601
12 年	549.94	606,162	1,493,398	713,684	779,714	69,606	4.9	91.5	2.46	2,716
17 年	552.19	643,351	1,525,393	724,427	800,966	31,995	2.1	90.4	2.37	2,762
22 年	552.83	684,183	1,544,200	731,114	813,086	18,807	1.2	89.9	2.26	2,793
27 年	557.02	705,459	1,537,272	726,700	810,572	△ 6,928	△ 0.4	89.7	2.18	2,760

表 2-2 神戸市の総人口及び対前回増減率の推移



計画地である垂水区は、平成7年頃24万人程であった人口が、震災により一時的に減少する。その後増加するが震災前の水準には戻らず緩やかに人口減少が続いている。

世帯数は年々増加傾向にあるが1世帯辺りの人数が減少しており、核家族化と高齢化に

よる減少と思われる。一方、若年世帯の増加とともに、児童・生徒数が増加しており、教室が不足している小・中学校もある。五色塚古墳周辺においても戸建て住宅や共同住宅が新築され、新たな住民が増えている。

表 2-3 垂水区の人口の推移

年次	世帯数	人 口			前年比較		女100人 に対する 男	1世帯辺り 人 数
		総 数	男	女	人 口 増減数	増減率 (%)		
平成 7年	89,106	240,203	115,897	124,306			107.26	2.70
8年	87,310	235,672	114,142	121,530	△ 4,531	△ 1.89	106.47	2.70
9年	84,706	229,440	111,538	117,902	△ 6,232	△ 2.64	105.71	2.71
10年	82,950	224,711	109,587	115,124	△ 4,729	△ 2.06	105.05	2.71
11年	86,441	225,681	109,117	116,564	970	0.43	106.82	2.61
12年	89,385	226,230	108,246	117,984	549	0.24	109.00	2.53
13年	89,908	225,361	107,621	117,740	△ 869	△ 0.38	109.40	2.51
14年	90,490	225,037	107,176	117,861	△ 324	△ 0.14	109.97	2.49
15年	91,104	224,873	106,811	118,062	△ 164	△ 0.07	110.53	2.47
16年	91,080	223,565	105,922	117,643	△ 1,308	△ 0.58	111.07	2.45
17年	91,546	222,729	105,312	117,417	△ 836	△ 0.37	111.49	2.43
18年	91,748	221,586	104,684	116,902	△ 1,143	△ 0.51	111.67	2.42
19年	91,975	220,556	104,070	116,486	△ 1,030	△ 0.46	111.93	2.40
20年	92,490	220,217	103,751	116,466	△ 339	△ 0.15	112.26	2.38
21年	93,183	219,957	103,560	116,397	△ 260	△ 0.12	112.40	2.36
22年	94,016	220,411	103,928	116,483	454	0.21	112.08	2.34
23年	94,666	220,316	103,838	116,478	△ 95	△ 0.04	112.17	2.33
24年	94,577	220,267	103,611	116,656	△ 49	△ 0.02	112.59	2.33
25年	94,997	220,255	103,379	116,876	△ 12	△ 0.01	113.06	2.32
26年	94,957	219,494	102,841	116,653	△ 761	△ 0.35	113.43	2.31
27年	95,473	219,474	102,740	116,734	△ 20	△ 0.01	113.62	2.30

表 2-4 垂水区の総人口及び前年との増減率の推移

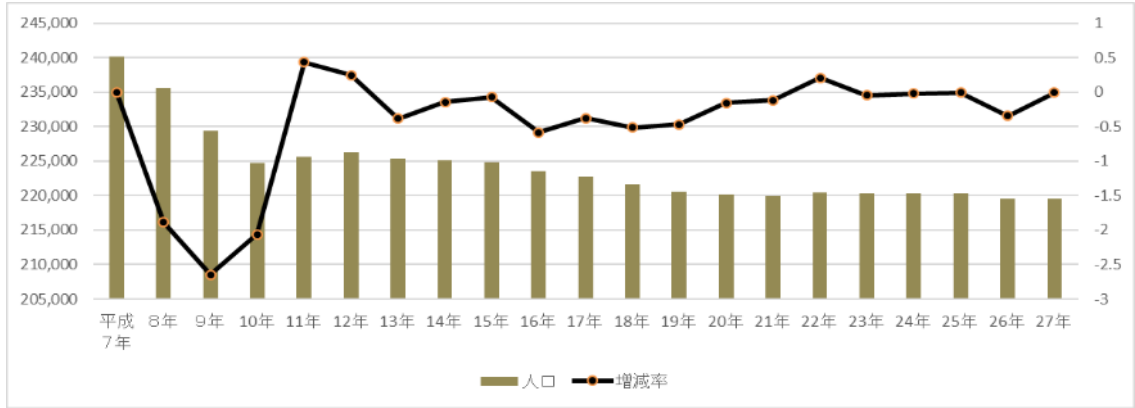
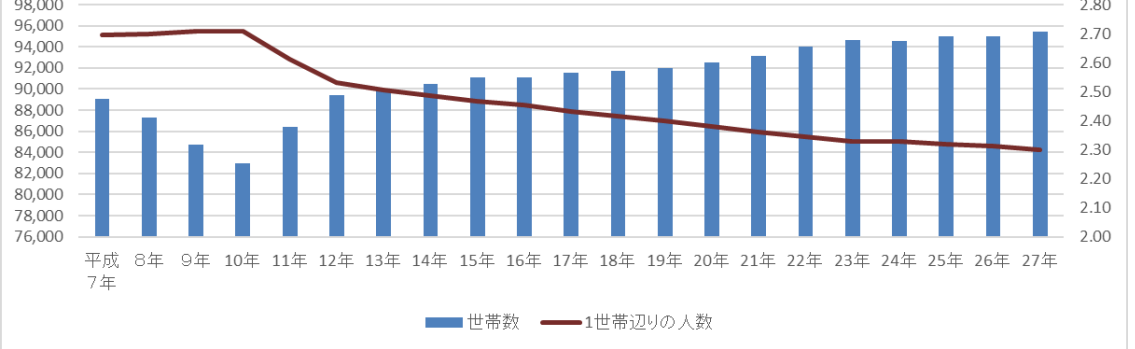


表 2-5 垂水区の世帯数と1世帯辺りの人数の推移



(2) 産 業

神戸市は、我が国を代表する国際貿易港「神戸港」を要し、慶応3年（1868年）の開港以来、国際港湾都市として発展してきた。平成30年度における全国の港の中で神戸港の貿易取引額は、輸出額7兆6,896億、輸入額4兆2,802億（積卸港別貿易額表（平成30年 確定値）財務省貿易統計より）で、名古屋港、東京港、横浜港に次いで全国4位である。

開港とともに開設された外国人居留地を通じてもたらされた様々な洋風生活文化に刺激を受け、アパレル、洋菓子、神戸洋家具などの地場産業が生まれた。また、国際貿易港の機能を生かして、原材料の輸入や製品の輸出に有利なことから、ケミカルシューズ、コーヒー、真珠加工などの産業が生まれた。中でも洋服産業は、明治以来神戸洋服業界はオーダーメイドとして発展したが、アパレル企業が多く設立されたのは戦後になってからである。昭和30年代前半以降、次第に商品企画力をつけ、デザインと卸機能中心の業態転換が進む。昭和48年のファッション都市宣言以来、消費者ニーズを捉えることに重点をおいたアパレル企業は急成長し、付加価値の高い知識集約型産業の中核としてクローズアップされる。

さらに、神戸の自然は六甲おろしや宮水などの恵みをもたらし、日本一の清酒の産地を生み出した。灘の酒造りは室町時代からすでに開始されていたとされ、一般的には江戸時代初期に伊丹から西宮に移り住んで酒づくりを開始したのが最初とされている。江戸時代には大消費地江戸に樽廻船で酒を運び、「灘の生一本」として一大産業に発展。灘五郷は、今津郷、西宮郷（以上西宮市）、魚崎郷、御影郷（以上東灘区）、西郷（灘区）を指す。硬水の「宮水」と酒造好適米「山田錦」と丹波杜氏などの人材が集まりやすい環境の良が灘五郷の酒造りを発展させた。

計画地である垂水区は、地勢が概ね平坦で肥沃であったため農産物が豊かである。神戸と明石の中間地であるため、大正期には住宅地として発展し耕地は減少していったが、沿岸部のいくつかを除けば純農村が大半を占めていた。主要農産物は米・麦で、果実栽培も行われていたようである。特に塩屋の果実栽培は急速な進歩を遂げ、栽培果実としてはビワ・カキ・モモ・ナシなどがある。

一方、明石海峡に面する沿岸部では漁業も盛んである。垂水区の漁民は自立性が高く、大正14年に設立された兵庫県水産試験場の設置運動の中心的役割を果たしている。

垂水の沿岸漁業で主力となっているものとして、海苔とイカナゴがある。長田区駒ヶ林から垂水区舞子にかけて閑漁期の収入源として、昭和35年頃からノリの養殖が始まり、現在では生産金額にして全漁獲生産額の約3割を占めるに至っている。また、イカナゴのシンコを使った「イカナゴのくぎ煮」は垂水発祥の料理とされている。2月下旬から3月上旬に迎えるイカナゴ漁の解禁は春の到来を告げる垂水の名物となっており、垂水駅周辺の商店街には幟が立ち並び、駅前の広場では「垂水いかなご祭」が毎年開催されている。

明治21年に山陽鉄道（現JR西日本）兵庫～明石間が開通し、垂水駅が誕生。のち、明治29年には舞子駅が誕生する。これにより、風光明媚な景観の舞子浜には、神戸や大阪からの観光客が訪れるようになり、舞子台場跡西側に亀屋・左海屋・萬亀楼などの料理旅館が

立ち並び、戦前の代表的な白砂青松の景勝地としてにぎわった。一方、明治27年には有栖川宮の別邸（現舞子ビラ）が建てられ舞子台場跡東側の海岸沿いには、呉錦堂の移情閣をはじめ、武藤邸・阿部邸・小曾根邸など財界人の別邸が建てられるようになった。

平成に入ってから、平成10年に明石海峡大橋が開通し、マリニピア神戸及びアジュール舞子の一部が共用を開始する。また、市立水産体験学習館（さかなの学校）も開館している。翌年からはレストランやアウトレット施設が順次建てられ、連日多くの買い物客が訪れている。平成11年には舞子台緑地公園が開園するなど近年観光施設などが整備されてきている。

(3) 交通

JRの動脈をなす東海道本線と山陽本線が神戸駅で接続し、市街地を東西方向に横断する。また、昭和47年に開通した山陽新幹線も、その北側に並行して敷設され、三ノ宮駅北東方1.5キロメートルの布引に新神戸駅が設置された。

私鉄では、東海道、山陽両本線を挟み、山手側に阪急電鉄神戸本線、浜手側には阪神電鉄本線がそれぞれ大阪へ通じ、山陽電気鉄道が西神戸の海岸を通過して姫路市と結んでいる。ほかに、神戸電鉄が



図 2-8 神戸市の鉄道網

六甲山地を越えて有馬、三田、三木、小野方面と連絡する。これらの私鉄は、昭和43年に完成した神戸高速鉄道東西線の高速神戸駅で結ばれ、神戸電鉄も新開地駅で接合された。さらに、昭和52年にはJR新長田駅一名谷駅間に市営地下鉄が開通し、昭和56年には神戸新交通がJR三ノ宮駅とポートアイランド間（ポートライナー）、平成2年には住吉と六甲アイランド間（六甲ライナー）で開通した。

昭和62年には市営地下鉄がJR新神戸駅—西神中央駅間に延長され、昭和63年に北神急行電鉄が新神戸から六甲山をトンネルで貫いて谷上へ延長し、地下鉄と直通運転を行っている。平成13年には市営地下鉄海岸線が、新長田駅—三宮・花時計前駅間に開通した。なお、昭和46年には市電（路面電車）全線が撤去されて、市バスが市内交通の中心となっている。また、平成18年の神戸空港開港に伴い、連絡橋の神戸スカイブリッジが開通、ポートライナーが空港まで延長された。

道路は、国道2号、43号、阪神高速道路、中国自動車道、第二神明道路、山陽自動車道などが幹線をなし、新名神高速道路が一部開通、大阪、名古屋、明石、姫路などと結ばれている。また、南北方向をとる国道175号、428号、主要地方道の神戸三木線、神戸三田線をはじめ、昭和42年開通の六甲山トンネル、さらに昭和52年開通の新神戸トンネルなどによ

り、北部地区との連絡が強化された。平成10年に神戸淡路鳴門自動車道と明石海峡大橋が開通し、淡路島経由で四国と結ばれている。

海上交通では、国際的貿易港として百数十か国との間に定期航路網を開設し、平成28年の入港船舶総数は3万5189隻、うち外航船舶が6757隻で、コンテナ船、各種タンカーなどの専用船が約80%を占める。内航船舶は2万8432隻、その大部分はフェリーボート、客船が占め、地元兵庫県をはじめ西日本諸

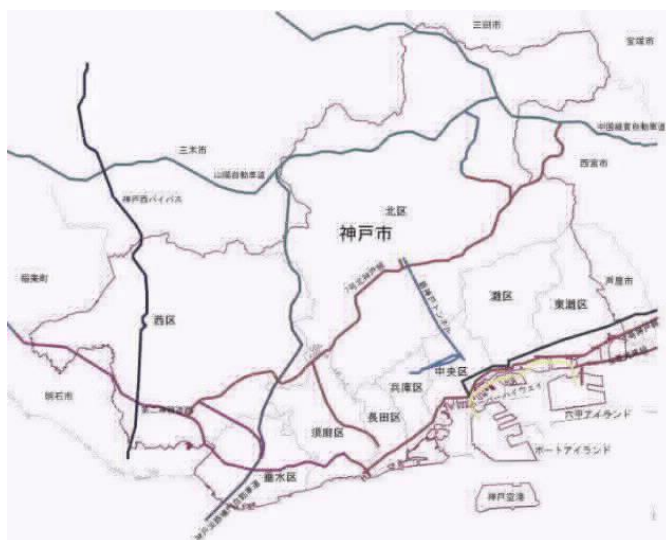


図 2-9 神戸市の主要幹線道路

県との結び付きが強い。なお、内航船舶は明石海峡大橋の開通により大幅に減少している。

(4) 神戸市の文化観光資源の把握

神戸市は、南は瀬戸内海に面する沿岸部と、北の六甲山系の内陸部で構成される都市であり、市内の数多くある様々な歴史・文化資産や観光資源などは、市内の地理的状况によって特徴が異なる。このうちの市内の文化財については表2-6のとおりである。

建造物については、市内唯一の国宝建造物であり中世密教寺院の典型例である太山寺本堂(図中①)や、我が国最古級の民家建築として有名な箱木家住宅(図中②)など、中世の文化財建造物が主に内陸部に残っている。沿岸部では、旧ハッサム家住宅(図中③)や旧トーマス家住宅(図中④)など、明治期より神戸が我が国を代表する国際貿易都市として発展してきた歴史を今に伝える遺産が多く残る。

本史跡と関連のある国指定史跡では、3世紀後半に築造された西求女塚古墳(図中⑤)や処女塚古墳(図中⑥)、また幕末期の遺構として史跡指定されている明石藩舞子台場跡(図中⑦)などがある。古代から明治期までの文化財が多数存在し、これらの文化財のうち、主に埋蔵文化財については展示・公開・調査研究などを行う文化施設として神戸市埋蔵文化財センター(図中⑧)がある。

絵画や彫刻及び工芸品などにおいては、そのほとんどが仏教美術に属するものである。書跡で国宝に指定されている3件はいずれも奈良～平安時代にかけての仏教経典で(財)白鶴美術館(図中⑨)に所蔵されており、考古資料として国宝に指定されている弥生時代の桜ヶ丘銅鐸・銅戈は神戸市立博物館(図中⑩)に所蔵されている。美術工芸品の多くは、神戸市内の美術館や博物館において保管され、適切な環境下で公開されており、市内には規模もコンセプトも様々な美術館及び博物館が多数存在する。

神戸市の観光資源についても、沿岸部と内陸部で特色が大きく変わる。沿岸部では、元町の南京町(図中⑪)や国の重要伝統的建造物群保存地区としても選定されている北野町山本通地区伝統的建造物群保存地区(通称：北野の異人館)(図中⑫)など、国際的な港町とし

て発展してきた経緯から異国情緒豊かなものから、メリケンパーク(図中⑬)やハーバーランド(図中⑭)など埋立てにより造成された海岸部も観光施設として活用されている。

表 2-6 神戸市内の文化財一覧(平成 30 年 4 月 1 日現在)

	国宝	国指定	国登録	県指定	市指定	市登録	市認定	伝建認定	文環市指定	市選定	合計件数
	件	件	件	件	件	件	件	件	件	件	件
建造物	1	22	96	17	22	21	0	-	-	-	179
絵 画	1	47	0	0	10	0	0	-	-	-	58
彫 刻	0	20	0	6	21	0	0	-	-	-	47
工芸品	0	18	0	4	7	0	0	-	-	-	29
歴史資料	0	0	0	1	1	0	0	-	-	-	2
書 跡・古文書	3	12	0	3	5	0	0	-	-	-	23
考古資料	1	13	0	0	13	0	0	-	-	-	27
石造物	-	-	0	(9)*	15	0	0	-	-	-	15
芸 能	-	0	-	1	0	0	0	-	-	-	1
工芸技術	-	0	-	1	0	0	0	-	-	-	1
有形民俗文化財	-	2	0	3	1	0	0	-	-	-	6
無形民俗文化財	-	1	-	2	0	25	4	-	-	-	32
史 跡	0	6	0	2	8	0	11	-	-	-	27
名 勝	0	2	2	1	6	0	0	-	-	-	11
天然記念物	0	1	0	4	7	0	0	-	-	-	12
重要伝統的建造物群保存地区	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1
伝統的建造物(洋風)	-	-	-	-	-	-	-	33*	-	-	33
伝統的建造物(和風)	-	-	-	-	-	-	-	7	-	-	7
文化環境保存区域	-	-	-	-	-	-	-	-	9	-	9
歴史的建造物	-	-	-	-	-	-	-	-	-	43	43
	6	145	98	45	116	46	15	40	9	43	563



図 2-10 神戸市の文化観光資源分布図

内陸部での代表的な観光地である有馬温泉(図中⑮)は全国的にも有名であり、公共交通機関も整備され、神戸市中心部から約30分圏内にあることもあり、年間約170万人が訪れている。

六甲山系には展望台(図中⑯)などが整備され、豊かな自然を満喫できる神戸布引ハーブ園(図中⑰)のほか神戸市立森林植物園(図中⑱)などの文化施設がある。

文化遺産が豊富であり、それらが観光施設に結びつき全国的に有名な施設や地域が数多く点在するが、それらは主に神戸市の東部に偏りが見られる。今後は市の西部における文化観光資源の開発が求められている。

(5) 周辺地域の文化財の把握

本計画地周辺には、次のような文化財がある。

●市指定史跡 大歳山遺跡

山田川下流域右岸の丘陵状に立地する旧石器時代から古墳時代にかけての複合遺跡である。

「明石原人」発見者として知られる直良信夫氏が大正末年から昭和初期に調査し、学界に紹介された。採集された縄文土器は、後に「大歳山式土器」と命名され、近畿地方の縄文時代前期を代表する遺跡のひとつになっている。

その後、幾度かの発掘調査が行われ、縄文時代の土器・石器の出土だけでなく、旧石器時代のナイフ形石器や弥生時代前期の土器、弥生時代後期の土器と竪穴建物跡が発見されている。また古墳時代には、当該地は墓域として使用され、前方後円墳や円墳が築造された。

昭和40年代に遺跡地一帯の丘陵が宅地造成され、消滅の危機にさらされたが、多くの人々の努力下、遺跡の中心部約4,000㎡を神戸市が買い取り、昭和49年舞子細道公園内に遺跡公園として開園した。現在は、「大歳山遺跡公園」の愛称で親しまれている。平成24年には、全国的にも知られ、神戸市を代表する遺跡のひとつとして市指定史跡に指定されている。

住宅地の中に残る丘陵からの眺めは南側にひらけており、明石海峡大橋を望むビューポイントとなっている。



●市指定史跡 狩口台きつね塚古墳

標高42mの中位段丘上で明石海峡を見下ろす位置に立地する古墳時代後期の円墳である。墳丘は直径約26mの二段築成で、二重の周濠が発掘調査で確認されている。埋葬施設は両袖式の巨石横穴式石室で、盗掘を受けていたものの家形石棺片や須恵器、馬具や刀・刀子・鉄鏃・弓



金具などの鉄製品が出土している。鉄製品のうち金銅装馬具は一括性の高い良好な資料で、中でも金銅装鏡板付轡と金銅装花形杏葉は近畿地方での類例は少なく、分布の中心は愛知県以東と福岡県にあるとされている。これらの遺物から狩口台きつね塚古墳は、6世紀後半に築造され、7世紀初頭に追葬があったことがわかっている。平成9年度に古墳は市指定史跡に、出土品145点は市指定有形文化財にそれぞれ指定された。古墳は整備・復元され、「きつね塚緑地」として開放され、地域住民の憩いの場となっている。

●県指定重要有形文化財 遊女塚宝篋印塔

歴史的環境でも記したように、遊女塚は五色塚古墳の東方およそ100mの街道沿いに位置していたが、明治21年に鉄道敷設工事で塚は消滅し、塚上の宝篋印塔が西垂水共同墓地に移転され、現存している。

遊女塚の名称については、俗説として、建武の頃に博多の商人が江口の遊女のために立てたとか、大坂の遊女が下関に行く際に溺死したので塚を築くとか伝えられているが、はっきりとはわからない。

宝篋印塔は高さ4.04mの花崗岩製で、塔身に金剛界四仏を種子で表わし、隅飾突起には月輪内に四天王と四菩薩の種子が交互に刻まれている。基礎側面に銘文が刻まれていて、その中に「建武二二^丁_丑三」の銘があり、建武4年(1337)に建てられたことがわかる。



周辺では、遊女塚のほかに県指定重要有形文化財として、名谷町若宮神社階段横の西名の石造宝篋印塔、下畑町久昌寺境内の石造宝篋印塔があるほか、未指定ながら名谷町猿倉及び明王寺境内にも有銘の宝篋印塔がある。いずれも南北朝期のものである。

●史跡 明石藩舞子台場跡

嘉永7年(1854)、ロシア船ディアナ号の大阪湾侵入以降、急速に海防意識が高まり、文久3年(1863)の将軍徳川家茂による大阪湾の海防状況視察をうけて、幕命により新たに稜堡式の台場が築かれることになった。対岸の淡路島松帆台場とで明石海峡防備の要とするべく、軍艦奉行並勝海舟の指導により明石藩が施工し、元治元年(1864)に完成している。現在も海岸側からM字型の石垣を見ることができる。発掘調査の



結果、海岸護岸の石垣が築造当時のままのものであり、砲台の石垣全体も良好な状態で埋まっていることがわかった。これらの石垣は、幕末～明治初め頃の写真資料によると築造時の下層部分にあたる。上層部には砲門や出入口となるアーチ形門などがあったようで、

築造当時の高さは海岸から約10mもあったと推測されている。ただし、火薬庫などのほかの施設は造られず、大砲も据え付けることなく役目を終えている。

舞子台場跡は幕末開国期の政治・軍事・外交を知る上で欠くことのできない重要な遺跡であり、遺構も良好に残っていることから平成19年に国の史跡に指定された。

現在、史跡の一部は広場になっており、昭和5年(1930)に兵庫県が建立した「史蹟舞子砲臺跡」の碑が移設され、大砲形のベンチが置かれている。また、発掘調査で見つかった石垣の一部を露出展示している。

●登録有形文化財 旧武藤家別邸洋館

鐘淵紡績株式会社の中興の祖といわれる武藤山治(1867～1934)の私邸として建てられたものである。親交深い呉錦堂が明治20年代に西国街道沿いに舞子別邸を建てると、明治40年(1907)に西洋館と和館、撞球(ビリヤード)室からなる別邸を建てた。のちに昭和3年からはじまる神明国道(現在の国道2号線)拡幅工事により撞球室は撤去されたが、西洋館、和館とも当初のまま残されていた。山治の死後、鐘淵紡績株式会社に寄贈され、戦前は武藤山治記念館として、戦後は鐘紡舞子倶楽部として利用された。



明石海峡大橋が建設される際の周辺整備に際して、西方の狩口台へ西洋館のみが移築された(狩口台きつね塚古墳の隣地)。平成19年には、収蔵されていた調度品や書籍などとともに兵庫県に譲渡された。これを受けて、海への眺望と移情閣との位置関係を考慮し、舞子公園内に再移築され、平成22年から一般に公開されている。移築に当たり撞球室を外観復元した管理棟を建設している。

洋館は、木造2階建て、天然スレート葺き切妻屋根で壁面は下見板貼り、東と南には吹放しのヴェランダが付く。その南東角は円形に整えられており、外観上の特徴を示している。19世紀、イギリスで流行したクィーン・アン様式の特徴と合致するとされている。構造物や外装材の一部は新材で再現されているが、ステンドグラスや暖炉、家具調度品などは当時のものが残されていて、実業家の暮らしぶりが窺われる。

平成23年に国の登録文化財に登録されている。

●重要文化財 移情閣(孫中山記念館)

移情閣は、明治18年(1885)に来日し、23年頃に神戸で「怡生号」という貿易会社を設立し、定住した実業家呉錦堂によって建てられた別荘「松海荘」の建物のひとつである。

明治20年代に木骨煉瓦造2階建ての洋館(現在の「付属棟」)が最初に建てられた。その後、



明治30年代後半から40年代初頭に木骨コンクリートブロック造2階建ての「本館」が増築された。大正2年(1913)日本を訪れた孫文を招き、歓迎の午餐会が開かれており、現在の孫中山記念館の由来となっている。2年後に呉錦堂還暦と第一線からの引退を記念して、本館に隣接して木骨コンクリートブロック造3階建ての八角塔屋を建て、望郷の思いを託して「移情閣」と名付けられた。

しかし、昭和3年(1928)に始まる神明国道の拡幅工事に伴い、松海荘も撤去の対象となった。敷地は兵庫県が買収し、本館は撤去されたが、移情閣はそのまま残され、付属棟は移情閣となりて曳家された。その後、第2次世界大戦頃に接収され、戦後は呉家から神戸華僑青年会に寄贈され会館として使用された。昭和57年、日中国交正常化10周年を記念して兵庫県が寄付を受け、孫中山記念館として改修を行い公開されるようになった。

その後、明石海峡大橋建設のため移転を余儀なくされたものの、コンクリートブロック造3階建ての建築を移転することは建築基準法上不可能であったため、平成5年に兵庫県指定重要有形文化財に指定し、解体移築工事が進められた。平成12年(2000)に工事が完了し、一般公開が再開された。翌平成13年には「移情閣」の名称で国の重要文化財に指定された(「付属棟」は兵庫県指定重要有形文化財)。

●登録有形文化財 舞子公園旧木下家住宅

兵庫県立舞子公園の西地区内、山陽電鉄の南側の小高いところに位置する旧木下家住宅は、数寄屋造の近代和風住宅として知られている。

海運業を営んでいた又野良助が昭和16年(1941)に私邸として建築したもので、昭和18年には書院(仏間)・茶室など、西側の棟を増床している。その後、昭和27年に明石で鉄工業を営んでいた木下吉左衛門の所有になり、大正10年頃建設の土蔵を明石から移築している。



創建時の屋敷構えをほぼ完全に残しており、民家風の虫籠窓を付けた東西棟の大棟を中心に、東面に玄関、北東に台所、西北に茶室、南東に応接室、南西に仏間を配したH字形の平面形態に配置されている。また、建物だけではなく、中庭をはじめとする創建時の作庭の様子もよく残っており、舞子公園とともに緑豊かな景観を形成している。

平成12年に木下家より兵庫県に寄贈され、平成13年に国の登録有形文化財に登録された。現在は一般公開されており、お茶会をはじめ年間を通じて様々なイベントが開催されている。